『平家物語』における東国圏視点

山下宏明

一、はじめに

これまで積み重ねられて来た成果に立って、『平家物語』諸本の検討は、多面にわたる、物語の原態論・成立論を導き出して来た。その結果、従来の、叙事詩論を拠り所とする語り系原態説に対し、非当道系[1]に原態を想定する説が一般化しつつある。しかし改めてそれぞれの論点をふり返ってみるならば、テキスト批判を出発点としながらも、説話形成論[2]・唱導論[3]・伝承論をも含み込んで、それぞれの論点は等質でなく多様である。

おりしも、語りを発生の段階、あるいは毎回の言説そのものとしてとらえようとする論[4]が出るに及んで、改めて語り系（当道系）テキストの再検討を迫られていると考える。その手がかりとして、当道系と非当道系との間でもっとも顕著な違いが見られる頼朝挙兵をめぐる東国の動きをどのような視点でとらえているかがある。それは物語としての方法・構想にかかわる課題である。本稿では、頼朝の動きを中心に、かれをとりまく東国勢の描き方を諸本について検討し、物語本来のあり方がいかなるものであったか、現存の諸本には、いかなる力が加っているかを考えてみたい。諸本としてさしあたり、語り系（当道系）では屋代本をも考えに入れながら覚一本をとりあげ、これまで非当道系と言われて来た諸本では、四部本・源平闘諍録・延慶本の三本を対象にする。

二、「征夷将軍院宣」をめぐって

物語における源頼朝については、これまで物語としては描きえていないとする見方[5]が一般であった。確かに清盛・義仲・義経あるいは重盛・維盛といった人々に比べる場合、頼朝は脇役の域を出ない。そうは言うものの諸本の間で、頼朝への比重の掛け方に違いのあることを無視できない。この比重の置き方の違いをどのように読み解くかが、提起した課題にかかわってゆくだろう。それは、物語において、京都を中心とする圏と、東国圏とがどのような関係において位置付けされているかを解くことである。東国圏に一つの期を画するのが、歴史的には勿論のこと、物語においても頼朝の征夷将軍院宣の受領である。すでにこれまでの注釈に指摘されて来たように建久三年（一一九二）七月十二日であるはずの将軍任官を、物語は、いずれの諸本も寿永二

年（一一八三）十月のこととしている。そのわけは、物語の前後の脈絡から読みとる限り、この後に洛中で狼藉をはたらく義仲の行動様式を、この「将軍院宣」に語る頼朝の行動様式と対比して描く構想があること言うまでもない。しかしそれにとどまらない、鎌倉へ下向した院使中原康定（貞）との応答に、源平闘諍録は、

行家・義仲と申は頼朝か代官に指登て候へ以彼等に暫可被責三平家一候皆官加階は被レて成候の十郎蔵人木曽冠者と書候へ皆為二返事一は雖レ候境節聞書到来大に不レに得レ心候し……是等と皆頼朝か命に可随一之由被レと仰下一申候

とする。四部本は当該記事をおさめる巻を欠くが、延慶本は、

行家義仲へ頼朝使に都へ向フ平家へ頼朝威に怖レテ京都に跡ヲ不留一西国へ落失候ヌレハ其跡ニハイカナル尼公ナリトモナトカ可不打入一夫に義仲行家己カ高名カヲニ恩賞に預剰両入共国嫌申候ナル条返々奇快に候但義仲僻事仕候ハヽ仰て行家に可被打一候行家僻事仕候ハヽ仰て義仲に可被打一候当時も頼朝か書状ノ表書に木曽冠者十郎蔵人ト書テ候へトモ返事シテコソ候へ

とする。以後、頼朝の指図により、この義仲を追討のために義経らが派遣されることになるのであるが、ここに将軍院宣をあえて先どりして語るのは、この源氏一門の棟梁としての頼朝の座を物語が保証することにもなるのである。少くとも歴史的にはこの時点で頼朝の指示により行家・義仲が上洛したとか、平家が頼朝の威におそれて京都を落ちたとは言いがたいはずである。

ここで、この院使の登場を語る表現方法に注目したい。それは、闘諍録・延慶本ともに

（闘諍録）御使蔵人の右の府生中原の康貞と聞し九月四日東国へ下着同廿六日上洛院の御所の御坪に関東の子細を具に申上は

（延慶本）同九月四日鎌倉へ下着テ兵衛佐に院宣ヲ奉リ勅定ノ趣ヲ仰含メテ兵衛佐ノ御返事ヲ取テ廿七日上洛シテ院御所ノ御壺に参テ関東ノ有様ヲ委ク申ケリ、

として、その康定（貞）の院への報告には、

（闘諍録）康貞下向仕候て右兵衛に付二院宣一候ける…（以下、頼盛との対面の次第を語る）…自レ出二鎌倉一を始二一宿に米五斛充一を宿物共ネイ町ティ嚀に儲て兵士雑掌付て被レ送候依宅残豊一に乍然一引二施行一に候と語申は者法皇含レ玉フ咲を

（延慶本）兵衛佐被申候シハ頼朝へ雖蒙勅勘ヲ一飜而御使ヲ奉テ……其上鎌倉ヲ出候シ日ヨリシテ鏡ノ宿マテ宿々に米ヲ五石ツヽ置テ候シ間タクサムニ候ヒツレハ少々人ニタヒ宿々ニテ施行ニ引テコソ候ツレト細に申タリケレハ人ニ取セス己カ得ニハセテトソ法皇仰有テ大に咲ワセ給ケル

と、いずれも康定を語り手、院を聞き手とする。この語りの場が「候」という謙譲の助動詞として表れるのである。この語りのあり方は『平治物語』の第一類本で、義朝最期の次第を、その従者金王丸が直接見聞したとして常磐御前に語り報せるあり方と同じである。しかも、その康定の報告語りを、

○語申は者法皇合レ玉ヲ咲を（闕詠録）

○法皇仰有テ大ニ咲ワセ給ケル（延慶本）

と、いずれも語り手は、康定や院を越えて、さらに高い次元の全知視点に収斂することに見るように、この物語としての報告語りを、ただちに現実にあった康定の報告そのものの採取（速記）とは言えない。康定が語る鎌倉での頼朝との応答などに、諸本の間で大差は無い。しかしこの頼朝と康定対面の場を、語り系の屋代本・覚一本は、ともに康定の報告語りの方法ではなく、第三者としての全知視点を以て、語り手は鎌倉に下向、両人対面の場面をそのまま再現する。この方法も『平治物語』第四類本における義朝最期の物語の場合と同じである。

問題にしたいのは、語りの視点いかんよりも、頼朝挙兵をめぐって、これまで東国圏の性格が指摘されて来た非当道系の本文が、この頼朝への康定の院宣伝達を、とにかく語る場所を京都に置いていることである。この点、当道系の語り本においても、語り視点は康定の動きに従って東国へ移りながら、康定の帰洛、院への報告に収斂している点で非当道系と変らない。それに鎌倉においても康定の視点で以て頼朝ら東国の人々をとらえている。言いかえれば頼朝の将軍院宣をすら、『平家物語』は、いずれの諸本を問わず京都圏視点を以てとらえている。つまり、物語の視点は、京都圏にあるものと考えられる。

ついで検討すべきは、頼朝の挙兵をどう語っているかである。

三、四部本における頼朝挙兵

四部本が、頼朝挙兵について、内容的に重なる複数の記事を有することは、すでに指摘されるところである。都合、三種の話を有する。逐次、それ〴〵の内容を検討すると、

第一話（報）は、雅頼に仕える青侍が夢に頼朝執政の世を予知した。〈而ル程に〉（日次は全く不明）清盛が厳島に参詣する。社頭、少女に神託があり、東国の兵乱を予告する。清盛が貞能に命じ、東国の雄の中、たゞ一人参らぬ上総広常の上洛を促すべく大庭へ使者を送る。その使者が下り着かぬ前に、

(1) 八月十七日夜、頼朝山木を攻める。

(2) 北条らが頼朝に与力して八月二十日、石橋山に籠る。

(3) 同二十三日、大庭ら平家に志有る者が石橋を攻める。

(4) 頼朝、無勢により杉山へ入る。大庭が頼朝の行方を探す。

(5) 同二十四日、頼朝に味方する三浦が小坪で畠山重忠と戦い敗れる。

(6) 三浦義澄ら衣笠に籠る。

(7) 同二十六日、平家に志を通じる武蔵の軍士ら、衣笠を攻める。三浦軍、矢を射尽し、安房へ向け退く。

(8) 同二十八日、〈駿河国大介兵部権守〉が早馬を以て、頼朝が〈一院の院宣并高倉宮令旨〉を掲げて謀叛を起こしたこと、〈又山木の郷夜討の事申したりけレハ〉とする。

この大介兵部権守の素性はわからない。それに、この(8)の〈申したりケレハ〉の内容がどこまでを受けるのかも明確でない。例えば『吾妻鏡』の場合の記録のあり方から推して、あるいは(1)の地の文で記される山木攻め以下の経過報告が、すべてこの権守の報せによるものかも知れない。この段階で、頼朝が以仁王の令旨を帯びていたとするのは自然である。しかし、院の宣旨にまず言及するのは、この後、文覚と頼朝の関係を後説法を以て語る所で明らかになることだから、ここで院宣にまでふれるのは物語としては異例と言うべきであろう。もっとも古態本には珍しくない構成法であるようだが。とにかくこの第一報が京都で受けとめたものであることに注目しておきたい。

この第一報により、平家は維盛らを追討使として東国へ派遣することになるのであるが、景親（大庭）が〈重て立早馬を〉て申し来る。それによれば、

(1) 十七日、頼朝が山木を夜討ちにし、

(2)′ 石橋に籠って国々の家人を催す。

(3)′ そこで大庭自らは一門の糟屋らを具して二十三日、石橋を攻める。

(4)′ 頼朝は五、六騎になり山に入る。大庭らは、山中、頼朝の行方を求める。

(5)′ 大庭に同心する畠山重忠は小坪に三浦と合戦し、敗れる。上総広常が三浦に馳せ加わるとの報があり、その備えをせんとするが、結局広常は見えず。

(6)′ 広常の弟金田頼常は三浦の陣に加わる。稲毛・河越ら武蔵勢が大庭側に加ったので広常らは三浦衣笠に籠る。

(7)′ そこで味方はこの衣笠の攻略に向い、〈景親は尚向石橋へ可尋と兵衛佐を（大庭が早馬を以て）委申〉したという。

第一報と内容の上で重なりながら詳細には異同・出入りがあり、いずれにしろこの第二報を聞いて平家が〈大に喜〉ぶのは自然である。しかも平家は、これといった対策を施さない。

第一、二報ともに、京都の側で受けとめた語りであることに変りはない。語りの視点は京都圏にあり、それなりに一つの完結した物語になっている。単に違った報道を複数とり込んだといった資料集めの域を越えている。

問題は、続くこの謀叛の主、頼朝に関する第三話である。それは、京都にもたらされた報せではない。すなわち、〈抑も兵衛佐頼朝は〉として、その人となりと、伊豆配流の次第を語り起こし、続いて謀叛をおこした原因に言及して文覚を登場させる。ここで物語の主役は、これまでの平家から頼朝へ転換する。しかも注目したいのは、語り系本文のように謀叛の契機を文覚の勧誘のみに限定することがない。頼朝は相手の文覚を警戒して、勅勘の身として謀叛の志が無いとしながら、

南無八幡大菩薩三所権現願は与王へ神力を遂王へ多年の所望を且は果遂亡父の素懐且は奉レ息君の御憤を思心深は契上総介弘常三浦介義明以下の兵を窺レ隙を物を思

という。つまり頼朝主導による謀叛であることを明らかにしている。

それは、やはり上述のように、あえて物語の視点を転じて頼朝の紹介を行った言説と呼応する。この点、頼朝がひかえめに尻込みするばかりで文覚主導の形をとる語り系（屋代本・覚一本とも）とは、頼朝像にかなりの違いがあると言うべきであろう。それに四部本の、この第三話は、これまでの第一、二報（話）とうって変って、視点を頼朝へ移す。頼朝の挙兵を、京都への報せとして語るのではなく、語り視点を東国へ移して語る。それも、いわゆる全知視点を以て、関東での人々の動きを語り進める。すなわち、

(1)′(イ) 八月十七日、佐々木定綱が父秀義の使として北条を訪ね、謀叛の企てが大庭らの耳に入ったようだから、事は急ぐべきだと言い、頼朝もこれに同意する。

(ロ) そして早速、その夜、山木兼隆を討ったと言う。ただ一つここで疑問を呈しておくならば、この文の結びを〈被〉誅兼隆をば承ル〉として謙譲表現を見せていることである。この謙譲表現は、語り手の、だれを聞き手とする表現なのだろうか。

(3)″ 頼朝は、石橋の合戦に敗れて山へ入る。それを大庭景親が探したが、

(ハ) 広常が攻め来るとの報に景親が一たん鎌倉へ向ったので、頼朝は暫く山に籠った。

(ニ) 廿九日、時政ら六人を具して土肥から乗船。ただし時政を甲斐へ遣したとも言う。また後には、一条院の時の頼義の奥州攻めの吉例にならって七騎を具して安房へ落ちたとも言う。

(ホ) その出船の際、近藤国平が馳せ来たり同行を求める。そこで土肥実平は息男の遠平を下船させようとするが遠平がしぶるので頼朝がなだめて下船させる。

(ヘ) 船は安房へ接近するが、三浦の船がこの頼朝の船を見つける中に、安房国の北郡に着く。

(ト) 三浦義澄が頼朝の安否を質すが、北条らは三浦の心をためすため、主は自害したと偽る。落胆した三浦が自害しようとするので頼朝が名乗り出て、一行は、石橋・由井・衣笠転戦の経過を語り感涙にむせぶ。

上述の経過の中、(ロ)の山木攻め、(3)″の石橋合戦から安房へ向けて船出するまでの経過について語る東国視点の語りは、簡略で粗筋にとどまると言ってよい。それは四部本として、第一・二報に語り尽しているためであろう。言いかえれば、視点は第一、二報とうって変るけれども、内容の上では、第一、二報と、重複しながらこの東国圏語りとは相互補完の関係にあると言える。それは、単に資料や伝承を並べただけではない。この内容的に重複することと、視点の変化が見られることから考えて別種資料をとり込んだと思われる東国圏視点の語りをも物語として再構成しているものと見られる。

以下、四部本は、頼朝転戦の経過を、

(チ) 豊島清基、千葉常胤の参加。

(リ) 洲崎明神へ参詣。明神の神託に源氏の興隆と平家の亡びを予告する。この神託の参加も、上述のように語り視点を東国の頼朝へ移したことに由来する。頼朝の勝利を先どりしてプロット化する

ので、これまでの平家に視点をすえる「平家」の物語とは異質で、この間、文脈には屈折があると見るべきであろう。

(ヌ) 九月十五日、上総広常の参加。

(ル) 畠山・小山田ら角田川を渡り来る。

(ヲ) 角田・笠井の人々は、おどされて浮橋を懸ける。

(ワ) 石浜にて畠山が白旗を指して参る。

(カ) 頼朝、畠山を三浦の手に渡そうとするを伴沢成清がなだめ制する。

(ヨ) 頼朝納得し、白旗の由来を質し、これに赤革を付すことで使用を許す。

(タ) 大庭景親ら降人に参り、その弟景久を岡崎に預ける。

(レ) 景久、法華経読誦の利益により赦される。

(ソ) 関東八か国の軍士、源氏に従いつく。

以上、四部本は、頼朝の挙兵をめぐって三種の話を有するのであるが、相互の間に伝承の異同は有っても抵触するところは無い。第三の東国圏語りは、第一、二話と語り視点を異にし、加筆の可能性を有するが、第一、二話を相補う関係にあること上述した通りであり、四部本の現存本文が数次の編集段階を経た所業であることをものがたるものであろう。四部本来の文脈、視点としては、例えば、

○巻九、義仲最期の後、その首の大路渡しに悲劇の原因、頼朝との不仲を『史記』の「項羽本紀」「高祖本紀」に源を発する項羽と沛公の故事を引き、

義仲先雖レ入レ都守頼朝下知不劣三沛公計言一忽好三悪行一不随三天命一剰背三法皇の仰一及謀逆悪事余身首伝京都恥残後代事尤愚哉

に見るように物語としての構想の文脈は義仲を語ることにあり、頼朝は脇役にとどまる。この点、頼朝の側から義仲の非をあばき、とがめるという形をとらない。同じことが東下りする重衡とこれを訊問する頼朝、頼盛と頼朝との関係についても言えるのであって、頼朝はいずれの場合も脇役の域を出ない。

○巻十、新帝即位の後、元暦元年八月六日、〈九郎義経一谷勧賞被成左衛門尉則蒙使宣九郎判官申〉と語る。この後、屋島にある平家の悲嘆の様子を描き、続いて〈同十八日九郎判官義経留五位尉九郎判官申蒲御曹司範頼成参河守也〉とあり、その前後は、源氏主導のもと、京都での相次ぐ状況の変化と、対照的に屋島に落魄をかこつ平家を語ることに物語の構想があるわけであって、この間、頼朝が介入する場は全く無い。物語にあって、頼朝は脇役どころか、かげの人物以上のものでない。

○巻十二、元暦二年八月十四日の文治改元に続いて、源氏の除目に、義経が伊予守に任ぜられる。頼朝の指示によるものであるが義経は不満である。かげに頼朝がいるわけであるけれども、物語の視点は義経にあり、その不満を主題とする。

○同じく巻十二、梶原の讒言により義経と頼朝の仲が不穏になるが、やむなく義経は頼朝追討の院宣を乞い受ける。この場合も義経の側

に視点をおいてとらえる頼朝で、梶原が悪役を演じながら頼朝は、さらにそのかげの存在である。範頼が頼朝の疑いを受けて討たれる経過についても同じである。

○前の義経の頼朝追討の院宣にかかわるが、逆に頼朝の側からの要請により義経追討の院宣が下る。これを四部本の語り手は、〈今月六日依頼朝申可追罰義経之由被下院宣有不定（シナレコソ）我朝唐人本朝変夕州（ヘンセキ）咲可（キ）謂加様事朝出調夕空（ママ）云心争可不（ヲ）令（ルシマ）恥乎〉とする。行動の主体は頼朝でありながら、物語の主役は当局の朝令暮改の方針により追いつめられる義経であって、頼朝は、この主役を追いつめる脇役を演じているわけである。

○頼朝の要請により、守護・地頭の設置、兵粮米の徴収が決まるが、語り手は、この事態を〈我朝未（ダ）先例〉ながら〈源二位所申難（キ）黙止事被（トカヤ）免（セ）〉とする。その行動の主は頼朝であるけれども、物語の主題は、頼朝の強行策に押され困惑する院当局である。その意味で頼朝は、やはり脇役の域を出ない。大宮佐（一条殿）の官位昇進と頼朝のかかわりについても同じことが言える。

以上、四部本の物語の基本構想の視点は、京都側にあるのであって、前記、頼朝挙兵の三話の中の第三話は異質である。それに、巻四以仁王の討死に続いて、日胤なる者が頼朝の要請により八幡宮に千日参籠、大般若経を読誦したところ、六百日目にして〈金甲（ノヲ）自御宝殿一賜（ルト）有二（リケル）御示現〉という。これは頼朝の後日、天下平定を予告するもので、物語の手法としては、プロットをなすもので、前の頼朝挙兵をめぐる第三話と同じ方向を示すものである。

以上を総合して考えるならば、四部本の、頼朝をめぐる物語の視点は、本来京都圏にあることを基本としながら、一部、東国圏の視点を外からとり込んだと見るのが妥当であろう。

これまで四部本は非当道系に分類されながら、全般に増補が少く、延慶本などに比べれば当道系に近いことが指摘されて来た。(6) 説話構成の面でも、語り系のあり方を思わせる個所があることを見のがせない。その意味で、四部本から、特に東国圏の伝承を加筆と見て取り除くならば、それを非当道系と分類できるものかどうか、再検討を要するところである。

四、源平闘諍録における頼朝挙兵

諸本分類から言って上述の四部本に近い闘諍録はどうか。従来、同じ非当道系の略本と言われて来たが、頼朝の描きようには、両者の間にかなりの違いがある。一口で言って頼朝の存在が物語の冒頭から顕著である。すなわち冒頭、桓武平氏の系図をたどる中に、例えば梶原について、その平三景時が、

羽林頼朝（ニハ）為（タリ）後陣大将軍一

とし、早くも、東国平定後（建久元年十一月廿四日、右大将を兼ねる）の頼朝とのかかわりにおいて景時をとらえる。上総広常についても、

広常権介依頼朝之命（ニ）為二梶原平三景時一（カ）被誅

とする。『吾妻鏡』は寿永二年の部分を欠くが、寿永三年一月一日の

条に

前武衛無二御参宮一去冬依二広常事一、営中穢気之故也

とあり、『愚管抄』巻六にも

介ノ八郎ヒロツネト申候シ者ハ……（頼朝にとって）功アル者ニテ候シカド……梶原景時シテウタセタル事、景時ガカウミヤウ云バカリナシ。雙六ウチテ、サリゲナシニテ盤ヲコヘテ、ヤガテ頸ヲカイキリテモテキタリケル、

とある。同年十月、頼朝の東国沙汰権が公認されて後の事件を先説している。千葉常胤についても、

常胤千葉大介給二鎌倉殿之左一座一

とあり、畠山重忠についても、

重忠畠山之次郎鎌倉殿先陣大将軍是也

とし、北条時政についても、

時政北条四郎……為二右大将頼朝舅一

とする。桓武平氏の系図をたどり（これが物語本来の文脈）ながら、頼朝との関係を注記せざるをえないほど、闘諍録の編者にとって頼朝の存在が大きいということである。されば続いて、盛長を相談相手とする頼朝の、伊東祐親の娘への接近をも語る。両人の間に一人の男子を設けたところで、

頼朝馳上都一欲打二父敵清盛一乍言二所権現三嶋明神御宝殿秘被レ納二願書一

というのは、明らかに物語の結末、頼朝の東国政権確立を先どり、予見する言説である。

この直後に、平家一門の栄花「吾身栄花」を描くのは、前後の文脈からして異様で、それほど、その周辺は源氏の物語の色彩が濃い。間に挿まれる、物語本来の平家の栄花物語が異様に見えるぐらい改作が行われたということである。

この祐親の娘との仲を妨害され、裂かれるに及び、定綱は一命を賭して祐親を討とうとするが、ここでも頼朝は、

何閣大事敵一小事可レ失命一

と、かえって定綱をなだめる。言うまでもなく〈大事〉の語に、朝朝は平家討伐をこめている。頼朝は、北条へ脱出する途中でも

八幡大菩薩日本国頼朝令二打随一給

と祈念し、二所権現に精誠をいたしている。頼朝が改めて北条の嫡女と契るに及ぶと、時政が一たん制止しようとはするものの、盛長と懐島景能が登場して、頼朝の天下平定を予見する。時政も頼朝と政子を招き入れ祝言連歌を催し、

此連歌実頼朝父子共栄北条可二繁昌一奇瑞也

と言う。闘諍録は、このように物語の冒頭から頼朝を重く位置付けしている。

頼朝挙兵については、相にく挙兵当時を描く巻を現存本は欠いているが、頼朝が安房へ渡って以後を次のように語り進める。四部本との関係を考えるならば、上述の四部本の(ヲ)安房へ着いて以後が比較の対象となる。すなわち、

(ヌ)′ 九月四日、頼朝一行は上総から下総へ向う。広常が参り、疲れた兵に代り新手を以て先陣をつとめようと申し出る。その勢揃え。

Ⓐ そこへ千葉常胤が参り、広常をおさえて自らが先陣をつとめようと言う。その勢揃え。

Ⓑ 平家の方人、千田判官代藤原親正が平家に義理立てをして頼朝に矢を射んと千葉結城へ向う。その勢揃え。

Ⓒ おりから祖母の葬儀を営んでいた加曽利（千葉）冠者成胤は、目前に敵を見かけながら素通りさせるわけにはゆかぬと、七騎でうってかかる。

Ⓓ そこへ到着した上総広常は成胤を助けるため先懸けしようとする。成胤が怒り、広常に先行しようとする。

Ⓔ 親正は無勢のため次浦の館へ退く。

Ⓕ 北条時政は頼朝に見参し、親正を追うよりも、大庭・畠山を討とうと進言、頼朝の同意をえる。

Ⓖ 頼朝は成胤の功績に感じ、天下を平定したあかつきには、北南（未詳）を妙見大菩薩に寄進しようと言い、併せて妙見と千葉氏とのゆかりを問う。

Ⓗ 常胤が妙見の由来を語る。昔、先祖の将門が妙見の加護を受けた。以後、将門が祀ったが、暴虐をはたらいたため、妙見は将門のもとを離れ村岡良文のもとへ移り、以後、わが家の相伝するところとなったこと。

Ⓘ 頼朝は感動し、妙見を源氏に渡せと乞うが、常胤は一門と妙見との関係を言って拒絶する。

Ⓙ 頼朝は八幡に祈念し、真間継橋を渡って府中に至る。

Ⓚ 平家をはばかる在庁の者が参らぬので、召し出した下種男に厩を預ける。この男は奉公の忠により椎崎村を賜わる。

(ル)′(ヲ)′ 頼朝は常胤を奉行とし、葛西・江戸に命じ太井澄田に浮橋を懸けさせる。

Ⓛ 広常は、上野・下野を制して上洛せよと頼朝に勧めるが、頼朝は、むしろ敵に先んじて足柄を越え、甲斐源氏を率いて平家を討とうと言う。

Ⓜ 頼朝、豊島御庄滝の河に達する。

Ⓝ 勅勘をこうむって都にいた梶原景時は、頼朝の動きを聞き知り、京を脱け出して東国へ下向、頼朝に見参する。頼朝は感心し、以後、軍の成敗をかれに委ねる。

Ⓞ 畠山重能・小山田有重らも京を逃げ出して関東へ下向。

(ワ)′ 畠山重忠ら白旗をかかげて馳せ参る。

(カ)′ 頼朝、畠山の旧悪を責めるが、梶原が仲裁して弁護、三浦義澄も大事を説き頼朝をなだめる。

(ヨ)′ 頼朝納得し、〈改三文一ッ計一〉ことで白旗の使用をも許す。

Ⓟ 豊島らが馳せ参り、一行、武蔵国府に着く。

Ⓠ 大庭に与力していた人々が降り参る。頼朝、石橋合戦の際の旧悪をなじる。荻野季時、勝負の道を語り反論。滝口三郎らは処刑

と決す。梶原一門は赦される。

Ⓡ 大庭景親、降人に参り、広常に預けられ斬られる。弟景久は、降参するをいさぎよしとせず上洛して平家へ参る。

以上、闘諍録では、安房落ち以後の頼朝の歩みを四部本の第三話同様、東国圏に視点をおいて語り、一部(ヌ)′(ル)′(ヲ)′(ワ)′(カ)′(ヨ)′に四部本との重なりを見せながらも、別の伝承、資料によるものと見るべきであろう。

頼朝の挙兵をめぐって、四部本・闘諍録はいずれも物語の基本的文脈としては、京都に語り手の視点を置きながら東国圏の語り視点をとり込んだものと見られる。しかも、その東国資料は、両本文の間で、根本的に異同は無いが、千葉、上総もしくはそれ以下の武将レベルの動きについては出入り、異同が有る。言いかえれば、『平家』古態本が拠った東国資料(伝承)は一元的ではなく、かなり多元的であったと想像される。中でも、物語としての構想から見て、闘諍録の東国圏寄りが顕著である。

事実、闘諍録は、上述の通り伊東・北条の娘との物語、頼朝の平天下を見越しての祈念が見られる外に、次の通り、頼朝のかげが濃い。すなわち、

○巻八下の終り近く、西国・九国を管領する平家を追討するため範頼が大将軍として派遣されるが、範頼軍は室・高砂の遊女を相手に遊びにふけって動かない。見かねた梶原景時が義経に屋島攻めを促すが、義経は〈自三鎌倉殿一不蒙大将軍之仰一者〉、兄範頼を越して屋島を攻めるわけにはゆかぬと言う。そこで景時の甥生田次郎を鎌倉へ送り、義経を大将軍としてほしいと言いやったとする。ここには源氏の棟梁としての頼朝の位置の確立が見られる。

○巻五、頼朝が関東を制し、富士川に平家軍を破って後、伊東祐親は自害する。これは頼朝が流人として、祐親にその娘との仲を裂かれた時、八幡に天下平定と祐親への報復を祈念したことと呼応する。そしてこの時点で頼朝は例の娘を召し出し、自ら恩顧をかける相馬師常との仲をとり持ち、頼朝を舅と思えと言ったとする。この話は、伊東の娘の後日談でありながら、頼朝と師常との間の主従関係を描く、言いかえれば頼朝の東国への勢力扶植を強調するものである。

現存する巻が限られるという制約はあるけれども、巻一の冒頭に見るように、闘諍録の東国圏へのかかわりは、前述の四部本に比べて一層濃厚である。四部本が京都圏を主要視点としながら、東国圏の伝承を外部からとり込んだと推測されるのに対し、闘諍録は物語の構想にも及ぶ、根底から再構成しようとする姿勢を見せている。しかも、その本来の基本構想をなすものは、やはり京都圏にあると言うべきであろう。

五、延慶本における頼朝挙兵

原態の推定に、ゆるがせにできないのが延慶本である。上述の四部本・闘諍録のあり方と比べながら検討すると、

(I) 物語の基本的文脈、視点は、やはり京都圏である。すなわち

○（巻六本、廿八、重衡卿北方事）において京の人々は、世の平穏になったことを喜び、それを義経の功績とし、その執政を期待するが、頼朝はこれを不満とし、義経が平大納言時忠の婿になるをも承服できないとする。頼朝の反応のし方には、政治的な意味があるのであるが、この物語の語り手の視点は、政治的な判断よりも、むしろ京の人々の側にあって、その思いも義経に傾く。その意味で頼朝は、物語の脇役にとどまる。

○（巻六末・十四・諸国ニ守護地頭ヲ被置事）において、頼朝の代官北条時政が上洛して守護・地頭の設置、兵粮米反別充行を要請することを語るが、語り手は『無量義経』の文もさることながら〈吾国ニハ未其例ナシ〉と、頼朝の要請に違和感を示していて、京都側視点の色が濃い。

○（巻六本・卅二・頼朝判官ニ心置給事）で、宗盛父子に同行して鎌倉へ下った義経に対し頼朝は警戒的である。〈十八日マテ（判官を）金洗沢ニ置給テ其後ハ遂ニ鎌倉ヘ入ラレズ〉と語る語り手の視点は、頼朝よりも義経寄りであり、頼朝は、主人公義経を突き放し、窮地へ追い込む脇役である。

○（巻六末・八・判官与二位殿不快事）で梶原の讒言により頼朝は義経を警戒する。判官もやむなく、これに備え頼朝追討の院宣を乞い受ける。語り手の視点は、悪役梶原のために追いつめられる判官にあり、頼朝はかげに位置する。（巻六末・十二・九郎判官都ヲ落事）で、義経が頼朝との不和を心外とし、やむなく都を落ち、九州勢の協力を促す院宣を乞い受けるのも、やはり視点は義経にあり、頼朝は脇役にとどまる。続いて（巻六末・十三・義経可追討之由被下院宣事）で、頼朝の依頼により改めて義経追討の院宣を下す、この当局の態度を朝令暮改と批判する語り手の視点は義経にあり、頼朝は、やはり主役義経を追いつめる脇役の位置を占める。

○（巻六末・十九・六代御前被召取事）以下、六代御前の助命に奔走する文覚が頼朝に強要するが、この一連の六代物語の視点は文覚と六代にあり、頼朝はやはり脇役にとどまる。この点、四部本も変らないところである。

以上、延慶本の物語としての基本的な視点は、やはり京都にあると見るべきであろう。ところが、一方で、延慶本には、

（Ⅱ）物語としては別の主役を立てながら、その主役を裏から支え行動させる。かげの主役としての頼朝の目につくことがある。それも頼朝の権力確立を先どりする形での介入のし方である。すなわち、

○（巻一本・十一・土佐房昌春之事）で、いわゆる額打論の事件に山階寺側の西金堂衆土佐房昌春が乱棒をはたらくが、この昌春について、いつのことか年次は不明であるが、針庄の事件にとがめを受け、大番のため上洛していた土肥次郎実平に預けられる。昌春はこの土肥と親しくなり、

重テ南都ノスマヰモ今ハ叶マシ流人兵衛佐殿コソ末ヲタノモシケレト思テ伊豆北条ニ下テ兵衛佐ニ奉公シタリケリ

という。頼朝も昌春を重用し、後日、以仁王の令旨により謀叛を起

こした時、昌春に旗を賜ったこと、しかしあまりにも〈キリ者〉であったので、いずれは春日明神の罰をこうむだろうと人々に噂された。はたせるかな後日、頼朝の指示により義経を追討に向い逆に討たれることになることを、いずれも先説法を用いて語る。この場の物語の主人公は昌春であるが、その後日の結末、（重なる暴挙により）神罰をこうむることになるのを語るのに頼朝との関係を先説し、しかもこの昌春に頼朝の将来を〈末ェタノモシケレ〉と予見させている。物語のかげに重い位置を占める頼朝をほの見せているわけである。

○（巻二本・廿二・小松殿熊野詣ノ由来事）で重盛が〈去三月三日〉の夜の夢に三島明神が現れ、頼朝の願いをいれて清盛の首を切ると言う。ちなみに頼朝の三島詣でについては、『吾妻鏡』にその記録が散見する。この夢見が重盛の熊野参詣の契機になったとするのであるが、この前後は、重盛を主人公として、平家一門の滅亡を予見することを語り進める中に、早くも頼朝の平家討伐を予告するものである。ちなみに語り系では、屋代本は清盛の首さらしを全く語らず、覚一本は重盛の夢を語りながら、清盛の首をさらす主は春日明神であって、三島明神ではない。したがって頼朝は関知しない。覚一本が春日明神を登場させるのは、この前後の、特に巻三の「南都炎上」に集約的に表われる、畿内における清盛の悪行に対する春日明神の怒りを語るもので、物語の文脈としては、上述のように、これが本来の構想である。それを延慶本は、東国の頼朝の側にひきつけて語るものである。

○（巻二本・廿八・師長尾張国（被流給事）で、師長らの、いわゆる大臣流罪の中に、江大夫判官遠業も加えられる。事を知った遠業は、今は逃れようが無いが、〈誠ヤ流人前右兵衛佐頼朝コソ平治ノ乱逆ニ父下野守誅セラレシタシキ者共ミナ〳〵失ワレテ只一人キリ被残ニテ伊豆国蛭嶋ニ被流サテオワスナレ彼ノ人ハ末タノモシキ人ナリ打憑テ下リタラハ若此難ヲ遁ル、事モヤ〉と思うが、関東下向の困難なることを考えて断念、自害したと言う。このくだりが語り系では屋代本には無く、覚一本には、

伊豆国の流罪人、前兵衛佐頼朝をたのまばやと思へども

とあるのみで、延慶本のような明確な先行の予見は無い。この延慶本の場合は、やはり遠業の判断の背後に、頼朝の将来を先どりする頼朝評が生きていると言うべきであろう。

○（巻二中・廿二・南都大衆摂政殿ノ御使追帰事）で、当局は、頼朝の謀叛を鎮めるため諸寺に祈祷を命じるが、三井寺で祈祷していた律浄坊が八幡に祈ったところ、逆に金の冑を頼朝に奉れとの示現をえたとし、この由を頼朝に報せようとして寺内の騒動にまき込まれて討死する。兵衛佐がこれを〈聞給テイカニ哀ヒト思給ケムサレハ律浄房ノ為ニトテ伊賀国ニ山田郷ト云所ヲ園城寺〉へ寄進したという。この頼朝の処置は、実権獲得後の処置を先説するものであるが、この先説法は、やはり律浄房の祈祷に呼応するものであり、頼朝の、物語における位置を示唆するものである。ちなみにこの律浄房の八

幡祈願は、語り本系には見られない。

○（巻三本・廿九・大神宮鉄ノ甲冑被送事）。頼朝追討を祈るために臨時の官幣を伊勢神宮へ立てるが、その宣命に〈源ノ頼〉と書き〈朝〉の一字を落した。〈頼〉のよみは〈たすく〉なので〈源をたすく〉と読めることになる。かくて神意も頼朝に加担するにあるとするのである。やはり頼朝の権力獲得を先どりし予告するものである。ちなみに、この宣命誤記の話は、語り系本文には見られない。

○（巻三末・廿六・頼盛道ヨリ返給事）は、平家公達の都落ちの一部であるが、頼盛が都を落ちる途中、八幡大菩薩の示験が有り、頼盛はこれを〈頼朝世ヲ打取テ一天ヲ心ニ任ムトテ頼盛ヲ恩賞スヘキ瑞相ニテソ有ラムト思〉ってとどまったと言う。語り系本文では、頼盛自身の判断によってとどまった、（したがって一門への背信行為である）とするのを、延慶本では、頼朝の先行きを予言する八幡の示験によりとどまったとするものである。八幡の神意を介して、頼朝の後日を先どりしている。頼盛の行動にも頼朝の先行きをからませているのである。

（Ⅲ）延慶本では、頼朝が脇役の位置を越えて主役として事を進めることがある。

○（巻二中・八・頼政入道宮ニ謀叛申勧事付令旨事）以仁王の謀叛に際し、頼政が王に協力の期待できる人々を列挙し、その中に〈伊豆国兵衛佐頼朝〉をあげる。さらに最後に令旨を掲げるが、その末尾に

然則源家之輩兼ヘ三道諸国ノ武勇之族ヲ宜ク加テ与力ヲ於厳命ニ致ス誅罰於清盛ニ若於有ワンニ殊功ニ之者御即位之後可被宛行ニ也者レハ依宣ニ行之ヲ

治承四年四月　日　伊豆守正五位下源朝臣

謹上　前右兵衛佐殿

トソ被下ケル

と、あて名を頼朝と明記している。令旨は、各人にあてられたのであろうが、延慶本は、特に、この頼朝の令旨を掲載したところに独自の姿勢を示している。それに、この後、頼朝は令旨を受けた後に、〈兵衛佐此令旨ヲ給テ国々ノ源氏等ニ被施行セ其状云〉として、以仁王の〈御気色〉を頼朝が〈執達〉したとしている。このような事実が現実にあったものかどうか。鎌倉幕府の公式記録である『吾妻鏡』は、この王の令旨を鎌倉幕府創設の聖典としている。その『吾妻鏡』でさえも上記、延慶本に見たような頼朝の位置の強調は見られない。全般に延慶本は『吾妻鏡』との関連が色濃いのであるが、この令旨の扱いから言えば、延慶本は『吾妻鏡』以上に頼朝の存在を強調したと判断し得る。令旨をめぐって物語の主役は以仁王でありながら、これを受ける頼朝の位置が以仁王の行為を越えて一人歩きを見せ始めていると言うべきであろう。そしてこのような頼朝の態度は、実は令旨を受ける前から、頼朝の期する所があっだとするのが延慶本である。すなわち

○（巻二中・卅八・兵衛佐伊豆山籠ニル事）頼朝は流人の身でありながら伊東の娘に接近する。武蔵・相模・伊豆・駿河の武士が源氏の父

祖重恩の輩であることを考え、

頼朝ニ心ヲカヨハシテ軍ヲ発サハ命ヲ可棄之由シメス者其数有ケレハ頼朝モ又心ニ深ク思キサス事有テ世ノアリサマヲ伺テソ年月ヲ送ケル

という。その娘との仲を伊東に裂かれ頼朝は怒るが、当面の難を回避し、道中、八幡に、〈征夷ノ将軍ニ至テ頼朝ヲ護神祇ヲ崇メ奉ヘシ〉と祈念している。

これらの話は、後述の頼朝挙兵の一環をなすが、物語の主役が頼朝になっていて、語り手は頼朝に視点を置き、その胸中期するところを語っている。頼朝が天下平定をなしとげた後、それまでの経過を遡って再構成するものに外ならない。なお、この伊東とその娘をめぐる頼朝の苦節談は、上述の源平闘諍録と重なるものである。ただ両者の間では、語る位置が大幅に異なる。すなわち闘諍録は、巻一、高倉天皇の即位を語り平家が栄花の極点を迎えるところに、対照的にこの頼朝の苦節を語ることにより、源平の対比を強調するものであるのに対し、この延慶本の場合は、巻五の頼朝の挙兵を語る、その冒頭に回想的に語るものである。いずれが先行形態であるかをにわかには判断し難いけれども、闘諍録の場合、やはりその書名にふさわしい構成法をとっていること、上述した通り物語本来の文脈としては、これら東国圏の資料、伝承を後に持ち込んだ可能性が大であることを考える時、構成法に関する限り、闘諍録の形態の方が手が一層加っていると見てよいだろう。

○(巻二末・一・兵衛佐頼朝発謀叛ヲ由来事)延慶本は、この標題(章段)を以て巻二末を開巻し、頼朝の略家系と、平治の乱から伊豆配流までの経過を略述している。これは明らかに新しい巻の巻起こしを意図するものである。そして挙兵のきっかけを語り始めるのであるが、〈日来年来モサテコソ過ツルニ今年イカニシテカヽル謀叛ヲ思企ケルソト人アヤシミヲナス〉という。この語りようは、語り系本文においてもほゞ同じで、この口調には、頼朝の挙兵を意外とする口吻が聞えて来る。しかし物語においては現実に、これまでに以仁王の令旨がきっかけをなしたことを語っており、特に延慶本の場合、上述したように頼朝自身の主体的な発意を重視していたのであるから、この語り口には文脈上の屈折がある。この点、以仁王の令旨に関しては、ほとんど頼朝の動きを語っていない語り系本文の場合、そのような屈折を見せない。こうしたところに物語本来の形態の痕跡がうかがえるかと思われるのであるが、延慶本にあっては、この点、やはり上述したところとの呼応を考えてのことであろう、〈後日ニ聞ヘケルハ四五月ノ程ハ高倉宮宣旨ヲ賜テモテナサレタリケルホトニ宮失サセ給テ後一院ノ院宣ヲ被下事有ケリ〉とし、重ねて〈其故ハ年来宿意モサル事ニテ高雄文学カ勧トソ聞ヘシ〉として、以下、文覚の参加を語り始める。ここで上述した頼朝の、内々源氏再興の思いをこめた苦節を受けて〈年来宿意モサル事〉ながらとして、文覚が演じた役柄の大きかった事を語る。しかも、そういいながら頼朝の主体的な意志をも活かす必要から、文覚の働きかけも

さることながら、文覚の謀叛を勧めることばを〈争カ此身ニテサ様ノ事ヲハ可思立〉と言い、文覚の本心を探りながら、〈心中ニハ南无八幡大菩薩伊豆筥根両所権現願ヘ神力ヲ与給ヘ多年ノ宿望ヲ遂テ且ハ君臣ノ御欝ヲ休メ奉リ且ハ亡夫カ素懐ヲ遂ムト志深ケレハ〉と、あくまでも頼朝自身の志であったことを強調する。この延慶本における文覚の機能は、朝敵の汚名を取除くために院宣を得る、そのメッセンジャーとしての位置をあまり越えるものでないとすら言えるだろう。主役は文覚よりも頼朝である。この点、語り系本文とは方向が逆転していると言えるだろう。文覚の奔走により院宣を入手して以後、頼朝はいよいよ年来の所願の実現にかかる。院宣を拝して後、京の方を向き〈八幡大菩薩ヲ拝奉リ当国ニハ伊豆箱根二所ニ願ヲ立テ〉、まず北条時政に相談を持ちかける。これら文覚をめぐり頼朝自身の決意を語るところは、上述の通り四部本にも見える（闘諍録は欠巻のため不明）が、四部本の場合、延慶本や闘諍録について見て来たような、頼朝挙兵のいわば助走をなす部分を欠くことを考えると、物語の文脈として完結性に欠ける。この点、延慶本のように助走を語るのが、この頼朝自身の思いを語る物語本来のあり方と見るべきだろう。その意味で四部本の、この文覚と対話する頼朝像は、延慶本やその周辺の、東国圏における頼朝像を借り用いたとするのが穏当であろう。あたかも四部本の挙兵の第三話全体が、本来の文脈とは異質の、他からの持ち込みを見せていたことと対応する。その頼朝挙兵の経過については、

（Ⅳ）延慶本の頼朝挙兵を語る言説は、四部本の場合と同様に、視点を異にする話を複数持ち込んでいる。

すなわち、形態的には、まず四部本の第一・二報（話）に通うもので、

○（巻二中・卅五・右兵衛佐謀叛発ス事）で、まず

九月二日東国ヨリ早馬着テ申ケルハ

として、視点は京都にあり、東国からの情報を受ける形をとる。しかも

伊豆国流人前兵衛佐源頼朝一院ノ々宣并高倉宮令旨アリトテ忽ニ謀叛ヲ企テ

とする。〈一院ノ々宣〉は、物語としてはこの段階ではまだ明らかになっていない話で、この後、文覚の登場を見て院宣入手が明らかになるのであるから、これは先説法によるものである。そしてこの早馬の報ずるところを上述の四部本と対照しつつたどると次の通りである。

(1) 八日十七日、屋牧を奇襲。
(2)″ 北条・土肥らを具して石橋に籠る。
(3)″ 大庭を大将として大山田・糟屋らが石橋を攻める。
(4)″ 頼朝は六、七騎になり杉山へ入る。
ⓐ 三浦義澄ら頼朝を求めて参るが会えず引き返す。
(5)″ 畠山重忠ら小壺にて三浦と戦い敗走。
ⓑ 〈後日ニ聞エケルハ〉廿六日、河越らが三浦を攻める。上総広

常、石橋の戦に間に合わず、衣笠の三浦義澄勢に加わる。

四部本の第一・二報と内容的に重なる面はあるものの、完全には一致しない。報道の範囲としては、大庭早馬による第二報と重なる。四部本との関係を厳密におさえ難いけれども、少くとも四部本・延慶本の、京都で受けとめた形をとる報道語りは複数あったことが想像できる。

この後、上述した通り、改めて頼朝を主人公にすべくその紹介を巻二末冒頭に行う。頼朝が一院の宣旨をえたところから、その行動開始を東国視点によって語り始める。その構成法は四部本の第三話と重なる。内容を見てゆくと、

ⓒ 頼朝は一院の院宣をえて早速、北条時政に相談を持ちかける。延慶本の東国圏視点語りにおいて時政の位置の重いことに注目したい。これは『吾妻鏡』と共通する傾向である。

ⓓ 時政は答えて、上総広常・千葉経胤・三浦義明の三名をかたらえと指示。併せて敵対するであろう人々を列挙。頼朝もその意見を納得する。ここで語り手が〈時政若知天之時歟将又得兵之法歟其詞一事トシテ違フ事ナカリケリ〉と語るのは、頼朝の目的達成を見通して後の意味付けであり、この間、やはり時政の評価が顕著である。

ⓔ 頼朝は八幡の放生会を考慮し、八月十五日以前の挙兵は見合わせると言い、時政もこれに同意する。

(1)‴ (イ)′ 八月九日、京から下った大庭は、佐藤秀義に、頼朝や時政の動きのあることを示唆する。秀義は定綱に命じ、この大庭のことばを北条に伝えさせる。頼朝も先刻承知していたと答える。この話は、上述の四部本の(イ)と内容的に重なる。しかし延慶本は、さらに弟たちを同行すべく立ち去る定綱に再会を約し、共に山木を討とうといざなう。二郎経高がこれを聞き三郎盛綱、四郎高綱のもとへも報せる。

ⓕ 山木はこれらの動きを察知し、人々と談合を始める。

ⓖ 佐々木兄弟四人、北条へおもむこうとするを、経高の舅渋谷がひきとどめるのを経高はふり切って馳せ通る。

ⓗ 十六日、頼朝、北条に兼隆討伐の儀をはかる。しかも約束した佐々木一門の参らぬを不本意に思う。北条、今夜は三島明神の神事なので明日まで待つよう促す。

ⓘ 佐々木兄弟、十七日、北条へ馳せ参り、頼朝喜ぶ。その遅参をめぐり応答。

(1)″ 十七日、北条ら屋牧を攻める。

ⓙ 定綱は搦手、経高は大手を攻める。

ⓚ 遅れて参った加藤景廉を頼朝は伽に置こうとするを景廉討って出ようとする。頼朝喜んで小長刀を与える。

ⓛ 景廉、北条に合流し、兼隆の部屋を襲いこれを討ち、合図の火を挙げる。頼朝これを見、景廉の成功を知る。

以上が、延慶本における山木(屋牧)攻めの経過である。(イ)′の大庭と佐々木秀義との談合、定綱の頼朝への通報、佐々木と頼朝の約

束、ⓗの佐々木遅参による頼朝のいらだち、ⓘその佐々木兄弟の到着と頼朝の喜び、ⓚ加藤景廉が頼朝から小長刀を賜り、ⓘその景廉が屋牧の館へ討ち入り兼隆の首を取る、などは『吾妻鏡』と重なる。ただし、例えば加藤参加の経過を、延慶本は一歩遅れて参加したとするのを『吾妻鏡』は、加藤が佐々木盛綱らとひかえの軍としてあったのが、合図の煙が一向に昇らぬのにいらだち増援軍として出兵したとするのとは微妙に違っている。性急な結論はさしひかえるべきであるが、その他の微妙なずれを考慮する場合、延慶本と『吾妻鏡』との関係は近い関係にありながら、その成り立ちは直接の書承関係にはないと見るべきか。ただ、延慶本のこれら山木攻めの経過に関する伝承が東国に胚胎することは確かであろう。

延慶本は、続いて、

ⓜ 頼朝に協力した人々。

ⓝ 土肥実平の提案により、頼朝廻文を諸国へ送る。

ⓞ 上総広常・千葉経胤、院宣を受け喜ぶも船筏に煩い多く、八月下旬まで遅参。

ⓟ 瀧口三郎は承諾せず、使者の盛長を愚弄、弟の四郎と論争する。

ⓠ 三浦義明、院宣を喜び、頼朝に加担するよう一門に訓示。

これら東国土豪らの動きは、四部本は勿論、『吾妻鏡』とも重ならない。

ⓡ 頼朝は早川党の進言により石橋に入りたてこもる。この事実も他の資料には見えない。

(3)‴ 同二十三日、大庭ら平家の方人が石橋へ襲い来る。道中、頼朝方の人々の宿を焼き払う。

ⓢ 稲毛と大庭合議の末、開戦、頼朝も応戦、大庭と北条の応答。佐奈田与一、頼朝の命令により先陣に立つ。その与一は討死を覚悟し、頼朝が天下を平定すれば子供らが頼朝に仕え、わが後世を弔えと言いおく。ここには、頼朝を主人とする、回りの人々の献身を語っている。ついで与一を中心とする人々の合戦を語る。

ⓣ 与一は俣野と組み討ちするが長尾新六に討たれる。頼朝、与一の討死をいたんで〈アタラ兵ヲ討セタルコソ口惜ケレ若頼朝世ニアラハ義忠カ孝養ヲハ頼朝スヘシトテアワレニ思ワレタリ〉とするのは、上述のⓢ与一の遺言に呼応するものである。

(4)‴ 頼朝、土肥をさして退く。萩野父子がこれを追う。頼朝は大見らに守られ杉山へ入る。沢六郎ら、道中、討死。頼朝、大勢では叶わずと再会を期して分散、北条らは甲斐へ赴く。頼朝に同行するは七騎のみ。土肥、これを故伊予入道貞任追討の時の佳例と喜ぶ。

ⓤ 大治四郎、石橋の敗戦、頼朝の討死を三浦に報せる。三浦一門、落胆して自害せんとするを、義澄、早まるなと制止し、三浦へ退こうとする。

(5)‴ 畠山、三浦軍の動きを知って、平家に義理立てして、これを攻め小坪に合戦。

ⓥ 畠山、三浦軍に上総・下総の勢が加ると見て退く。三浦、これ

を追撃、輪田二郎らの奮戦。駈け出る畠山重忠を半沢が制止。この上総・下総勢の動きに言及するのは、四部本の第二報の(5)′(6)′にも見えるが、その内容は必ずしも重ならない。

(6)″ 三浦義明ら討死を覚悟して衣笠に籠る。

(7)″ 同二十七日、江戸・河越ら衣笠を攻める。三浦義明、討って出ようとするのを制止される。義明自らは討死を覚悟し、一門には安房へ落ちて頼朝を探し出して仕えよと指示する。義明、江戸太郎に討たれる。一門この間に安房へ向う。

以上、石橋から衣笠にかけての合戦の経過については『吾妻鏡』が記録し、佐那田余一の討死についても重なる面があるが、例えば土肥実平や梶原景時の動きについては異同が大きく、三浦義明討死の次第も、『吾妻鏡』のそれは美化されていて延慶本と一致しない。両者はそれ〴〵源を別にするものかも知れない。各合戦について、延慶本がいわゆる「戦物語」として再構成、言説化しているのに比べて、『吾妻鏡』は所詮、記録にとどまる。目下のところ、両者の関係を性急に即断するのは、さしひかえるべきであろう。

以下、安房落ち以後を延慶本は次のように展開する。上述の諸本の比較としては、四部本の第三話、闘諍録が比較の対象になる。

ⓦ 土肥真平の妻が衣笠合戦の次第を真平に報せ、頼朝の行方を求めて安房へ下るよう示唆する。

(二)′ 頼朝の一行が小浦から安房へと向う。二郎大夫に命じ一行の烏帽子を調達させる。ここでも頼朝は大夫の労を謝し〈此勧賞ニハ国ニテモ庄ニテモ汝カ乞ニ依ヘシ〉と言ったとするが、やはり後日の治政者としての頼朝像の逆照射、再構成がある。その頼朝を主人として回りの人々の献身を語る忠節談である。なお、伊東入道が頼朝らの動きを察知し追い来る。それを〈賢クソトク御船ヲ出シテトソ人々言合ケル〉とする語り手の視点は、言うまでもなく頼朝側にある。

ⓧ 頼朝は、北条がすでに甲斐源氏に協力を要請していることを知らず重ねて宗遠行を使者として送る。道中、京より下向する土屋と会って喜び甲斐へ同行する。

(ハ)′ 三浦の船、竜が磯に着く。沖より入り来る頼朝の船に会う。

(ト)′ 輪田小太郎が頼朝の安否を質すが、岡崎自身も尋ねるのだといつわり、衣笠合戦の経過を語る。この様子を打板の下に身をひそめて聞いていた頼朝は〈哀世ニアリテ是等ニ恩ヲセハヤトソサマ〴〵ニ被思ケル〉とするのは、やはり後日の頼朝像の逆照射である。ここで頼朝が姿を現わし人々を喜ばせる。和田小太郎が、前の頼朝の思いを先どりして〈今ハ本意ヲ遂ム事不有疑君今ハ只侍共国々分チ給ヘシ義盛ニハ侍別当ヲ給ヘシ〉とする要請、対する頼朝の〈所アテ余リニ早シトヨトテ咲〉ったとするのも逆照射によるものである。

これら(ハ)′(ト)′は、四部本の第三話に似てはいるが、見るように動作の主体が違っていて、両者の間に直接の関係は無さそうである。

ⓨ 一行は安戸の大明神に参り吉兆の神託をえる。頼朝の事業大成

へと向けて物語の構想がはりめぐらされている。この大明神参詣は、四部本第三話の(リ)と対応しながら、しかも違っている。

(ヌ)″ 頼朝、上総介・千葉介に参加を呼びかける。

Ⓐ′ 千葉胤経、結城の浦に参会、頼朝と同行して下総の国府へ入る。胤経の予期した通り江戸・葛西らが参集。

(α) 上総広常、遅参を恥じ、近くの、平家に同心する人々を討ち従え、これらを具して上総の国府に参会。頼朝、遅参を責めながらも喜ぶ。広常、頼朝に大将の器量のあることを感嘆、〈一定本意ハ遂給ヲムスラム〉と将門の例にひき比べる。この話は『吾妻鏡』治承四年九月十九日の条の記録と重なる。しかし『吾妻鏡』の場合、広常が頼朝を〈殆叶二人主之躰一也、依レ之忽変二害心一奉二私順一云々〉とするのは、広常の対応のし方において延慶本とは違っている。かくて両者の間に直接の関係を想定するのはさしひかえるべきであろう。それに闘諍録にて(D)に該当する広常のし方に違いのあることを注目しておこう。

(ル)″(ヲ)″ 江戸・葛西らが参る。これはⒶ′に先述していたところを再説したものである。特に延慶本では、頼朝は、一たん江戸らの旧悪をとがめながら〈当時ノ勢ノホシケレハ〉赦して後陣に同行させたとする。頼朝は、平家軍の動きを推測して富士川にこれを迎え討とうとし、江戸らに命じて浮橋を掛けさせる。

(β) 板橋に八か国の大・小名が馳せ参る。頼朝は喜び六所大明神に上矢を奉納する。

(ワ)″ 畠山重忠、乳母の半沢成清と状勢を語り合い、頼朝に帰服を決意し白旗を持って頼朝に見参する。四部本では伴沢は畠山を弁護する点で延慶本と異なる。

(カ)″ 頼朝、小坪の戦いに矢を射たことを責め、頼朝と同種の白旗を持つわけを質す。畠山、弁明し、千葉・土肥も畠山の勘当に反対する。

(ヨ)″ 頼朝納得し、旗には藍革一文を付けるよう指示する。

Ⓡ′ 大庭は状況不利と判断し相模へ引っ返して奥の山へ逃げ籠る。この大庭の動きは、四部本・闘諍録で、降人に参ったとするのと異なる。ちなみに『吾妻鏡』は、治承四年十月十八日の条に、大庭の動きを

大庭三郎景親為レ加二平家之陣一、伴二一千騎一欲二発向一之処、前武衛引二率二十万騎精兵一越二足柄一給之間、景親失二前途一逃二亡于河村山一云々

と記録していて、延慶本に近いが、重ねて十月二十三日の条に

大庭三郎景親、遂以為二降人一、参二此所一即被レ召二預上総権介広常一

同二十六日の条に

今日、於二固瀬河辺一景親梟首

とあり、結果的には闘諍録のⒹと重なる。延慶本では、このⒹ′を最後としてその行方を語らない。

以上、延慶本が語る頼朝挙兵の経過を四部本・闘諍録、それに

『吾妻鏡』と対照しつつ検討して来たのであるが、その結果、次のことが言える。

(i) 物語本来の構想（文脈）としては、京都の平家が大庭の早馬により報される形をとる部分がこれに当ると考えられる。

(ii) 延慶本には、京都圏視点を以てする頼朝挙兵の経過語りの外に、四部本の第三話同様、東国圏の視点を以てする語りが存在する。

(iii) その東国圏語りの内容は、四部本・闘諍録と同じく頼朝が天下治政の実権を獲得した後の視点を以てする逆照射によるものである。

(iv) この東国圏語りに関する限り、延慶本の話は『吾妻鏡』と重なる面を保有しながらしかも微妙なズレをも見せていて、両者の間に、直接の関係があったとは即断しがたい。むしろ、家の軍記としての性格から多様な伝承があった。その別々の伝を両者が採用したものである。特に延慶本は、個々の話を戦物語として言説化したものである。

(v) 延慶本の話は、四部本の第三話、闘諍録とも、頼朝の挙兵経過について基本的な大異は無いけれども、三者の間では戦物語に出入があるし、重なる物語についても微妙な異同がある。

(vi) 以上から言えることは、これら諸資料の異同は、時間的な経過による変化（生成）と見るよりは、東国において、頼朝の権力獲得の経過をめぐって多様な伝承や戦物語が生産されたと考えうる可能性が大である。

六、延慶本における頼朝の意味

以上、四部本・闘諍録・延慶本のいわゆる読み本系と呼ばれた諸本には、頼朝挙兵時の動きをめぐって、京都圏視点の外に、東国圏視点が参加していることを見て来たのであるが、しかもこの三者の間にも位相上とも言うべき違いがある。

まず闘諍録は、物語の開巻早々、桓武平氏の系図をたどりつつ、個々の人物について頼朝との関係を付言している。また、平家の栄花と対照するように頼朝の伊豆雌伏期の苦節を描いている点で、闘諍録は特に強く源平両氏の浮沈を意識している。「源平闘諍録」の書名が何よりもこの事実を雄弁に語っている。闘諍録に比べると四部本は、頼朝挙兵について話をのせながら、その始めの二話が京都圏の語りであることが示すように、京都圏の成立と考えてよさそうである。問題は延慶本の世界である。

(i) 延慶本には、上述したように京都圏語りの中に頼朝を脇役として位置付けをする一方、むしろ頼朝を主役として、その治政者としての風貌を濃くしている面が見られる。

○（巻四・卅三・兵衛佐山門（へ）牒状遣（ス）事）

義仲の洛中狼藉により京都から訴えを受けた頼朝は山門へ牒状を送り、平治の乱後、源氏一門がたどった経過をふり返りつつ、当時の平家の奢りのゆえに頼朝が挙兵したこと、平家がようやく西国へ

後退した後へ入洛した義仲が横暴をはたらくことを言い義仲を追討すべく祈祷をせよとの内容である。これら主役としての頼朝像は、その前に、事実をくり上げて将軍院宣の受領を語り了えているがゆえに可能である。ただしこの頼朝が発したという牒状は『吾妻鏡』にも見えない。その素性を再検討すべきであろう。

○（巻五本・六・梶原与佐々木馬所望事）

京都の義仲を追討するため東国軍が出発する。その際、頼朝の愛馬をめぐって、梶原と佐々木の間で、頼朝の対応のし方に差別があることは周知の通りである。延慶本は、頼朝がとった態度の理由を、佐々木高綱の父、秀能が平治の乱に主人義朝の身をかばって討死をとげた、その旧恩に報いるためとする。この頼朝の態度には、源氏累代意識が濃く、そこにもやはり東国の主としての頼朝像が先行している。

○（巻五本・二十・源氏三草山并一谷追落事）

義経軍の三草攻めに、田代冠者が先懸を進言する。その田代の素性について、〈生年十一歳ノ年流人兵衛佐ノ見参ニ入テ宮仕〉えし、石橋合戦に伊東祐親らを追い散らす功績があった。〈カヽリケレハ兵衛佐九郎カ副将軍ニ成給ヘトテ被差制タル武者也〉とする。源氏の棟梁としての頼朝像の確立を見せている。義経勢に加わる熊谷直実について、熊谷が鎌倉を出陣する際、頼朝に目をかけられ〈今度ノ軍ニハ汝一人恃ムソ親ニモ子ニモ云ヘカラス軍ニヲイテハ忠ヲ尽テ頼朝ヲ浦見ヨ〉と励まされた。この事がその後の熊谷の行動を決定したとする。これは『吾妻鏡』治承四年八月六日の条、山木攻めに際し、土肥実平・加藤景廉ら〈当時経廻士之内、殊以重二御旨一軽二身命一勇士〉一人一人を召して〈偏依レ恃レ汝、被二仰合一〉とするのと同工で、『吾妻鏡』が編まれた当時の頼朝像を以てする逆照射がなされたものである。

その外、一谷合戦では、盛俊を討った猪俣、忠度を討った岡部、また、義経を討つために上洛し返り討ちにあった土佐房が、いずれも頼朝の名において、その行動を行っている。

(ii) 延慶本は、頼朝自身の主体的な行動を前面に押し出して描くことがある。

○（巻六末・廿一・斉藤五長谷寺へ尋行事、同廿二・十郎蔵人行家被搦事）で、頼朝の申し状により朝廷で人事異動を進め、義経と関わりを持った人々の官を解いたとする。

○（巻六末・卅二・小松侍従忠房被誅給事、同卅三・土佐守宗実死給事）では小松一門の忠房・宗実を政治家としての頼朝が決断して処刑している。一方、

○（巻六末・卅五・肥後守貞能預観音利生事）では、清水観音の加護を受ける貞能が頼朝の決断により赦される。

(iii) 延慶本は、四部本・屋代本などと違って、頼朝の官位昇進を刻明に記録している。すなわち、

○義仲追討の賞による四位の上下（巻五末・廿一）

○宗盛ら平家一門追討の賞による従二位（巻六末・廿二）

などは、他の諸本に見られない記録である。そう言えば、

○（巻四・十七・文覚便ニテ義朝ノ首取寄事）では、頼朝の将軍院宣の直後、亡父義朝の官加階を語るために、（巻二末・七・文覚兵衛佐ニ相奉ル事）で、頼朝の挙兵当時、文覚がいつわりの首を以て頼朝の関心をひいたとしていたのと呼応して、この度、本当の首を差し出したとする。これは頼朝の出世物語を貫こうとする手法によるものである。

物語の後半に改めてこのような、頼朝を物語の中核に置き源氏の物語として再構成しようとする構想のしめくくりとして物語末尾の（巻六末・卅九・右大将頼朝果報目出事）がある。〈イミシク〉〈目出〉たき〈果報〉によって〈羽林大将軍ニ任シ拝賀ノ儀式希代ノ壮観〉なるをえることができたとするのである。

このように考えるならば、延慶本は、京都圏視点を以てする『平家物語』を骨組みにしながら、『吾妻鏡』にも通うところのある東国圏視点を以て物語を再構成したものと言える。

○（巻二末・九・佐々木者共佐殿ノ許ヘ参事）で、頼朝の挙兵当初から北条時政が〈天之時〉を知る者として関与し、（巻二末・十三・石橋山合戦事）でも石橋の合戦に時政が敵の大庭に向って、〈我カ君ハ清和天皇ノ第六皇子貞純親王ノ御子六孫王経基ヨリハ七代ノ後胤八幡太郎殿ニハ御彦兵衛佐殿ノ御坐也忝ク太上天皇ノ院宣ヲ賜テ御頸ニカケ給ヘリ東八ケ国輩誰人カ御家人ニ非ルヤ

と言明して時政の役割を強調するのも『吾妻鏡』に類することである。

かくて延慶本の書名は『平家物語』であるけれども、東国圏的視点を以て物語を再構成したものと想定できる。

七、まとめ

『平家物語』が中世変革期の状況の中にどのように成立したか。成立年代は特定しえないけれども、少くとも状況として鎌倉幕府が確立して以後であることは動かない。当然、鎌倉を中心とする東国圏視点が入り込んで来るはずであるけれども、物語の語り手はそれをどのように受けとめたか。その点を考える手がかりになるのが、挙兵に始まる頼朝の描きようであった。このような課題を念頭に、これまで古態論争の焦点になることの多かった四部本・闘諍録・延慶本の三本を見て来たのであるが、いずれも京都圏視点を以て平家を物語の構想の中核にすえながら、東国圏視点を外から持ち込んでいる。言いかえれば、物語は、やはり「平家」の物語であった。その意味で原態を現存の非当道系諸本の形態そのものには見定め難い。むしろ形態的には東国圏視点を持ち込まない当道系本文が、本来の形を伝えているものと思われる。勿論、屋代本など現存の諸本をそのまま原態と見ることはできない。延慶本をも含め、四部本・屋代本などの現存古態本から想定する外ない。

一方、この源平の動乱をめぐって、東国土豪たちの、頼朝への献身を語る戦物語が広く行われていたはずである。このような状況におい

て「平家」の物語の再構成が行われたものと思われる。本来、当道系に属する――と言っても文字に定着した本文であるが――四部本の祖本が、逆にこの東国圏語りの影響を受けている。闘諍録（その分類については再検討を要するが）や延慶本は、この「平家」の物語を東国圏的視点を以て再構成したものであろうとするのが、本稿のたどり着いた結論である。

注

(1) 小西甚一氏「平家物語の原態と過渡形態」（『東京教育大学文学部紀要』72　昭和44年三月。拙著『平家物語の生成』（昭和59年一月）の序説および「一、諸本の分類と古態の認定」。

(2) 水原　一氏『平家物語の形成』（昭和46年五月）・『延慶本平家物語論考』（昭和54年六月）。

(3) 生形貴重氏『『平家物語』の基層と構造』（昭和59年十二月）・小林美和氏『平家物語生成論』（昭和61年五月）。なお生形氏（「平家物語の構想についての覚書」大谷女子短期大学紀要29　昭和61年三月）は、王権補弼者としての頼朝を描くのが物語の主題で、横暴をきわめる清盛の手から、この王権補弼者の権を頼朝に移譲する、その仲介をなすのが重盛ら小松の人々であるとする、延慶本に物語本来の主題と構想を読みとられる。本稿とは全く逆の見方になる。本稿は、延慶本などを「視点」を持ち込むことにより、その成立に迫ろうとするものである。

(4) 兵藤裕己氏『語り物序説』（昭和60年十月）

(5) 石母田正氏『平家物語』（昭和32年十一月）

(6) 渥美かをる氏『平家物語下』（昭和35年十一月）は、初期増補本としている。梶原正昭氏（『シンポジウム日本文学　平家物語』昭和51年三月）は、真字表記の裏に語りの口調を読みとっておられる。氏の発言は必ずしも四部本そのものの成り立ちに関するものではないけれども。